

前回の「車で巡る 源氏物語、京の旅(1)」(つれづれ35号掲載)では、洛中・市内へ入り、落葉宮一条邸まで確認した。今回はそこから見ていこう。前回と同様に傍線を付した語は、源氏物語に関連する建物、施設、社寺、仏閣などを示す。

落葉宮は修理された一条宮に迎えられるが(夕霧)、ここは夕霧が、前回でも述べた修学院(離宮)の辺りである小野の帰途通り過ぎた所でもある(夕霧)。その南南西に枇杷殿があり、度々里内裏となった邸である。さらに北西へ行くと、そこには時姫邸(蜻蛉日記)があり、人気の陰陽師・安倍晴明宅もその場所にあった。

花山天皇の出家に際して、晴明家の前を通った話は、あまりにも有名である(大鏡、今昔物語集)。そしてこの近くに晴明神社や説話でおなじみの一条戻り橋、それに讃岐で恨みをのんで亡くなられた、百人一首七十七「瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ」で知られる崇徳院の鎮魂の白峰神宮(その地は蹴鞠・歌道の飛鳥井邸跡にあたる)も存在する。どうやらこの辺は京都の魔界ゾーンといえよう。この時姫邸の北が、蜻蛉日記の作者・道綱母邸であり、その北西(京外)に、左近馬場が、物語では馬場殿(葵上の従者が、六条御息所の車に乱暴をはたらいた・葵)がある。その南西(京内)が、倫寧・道綱邸であり、この付近は蜻蛉日記のゆかりの地が多い。さらに

車で巡る 源氏物語、京の旅(2)

前 兵庫県立川西北陵高等学校
小田剛

その西に、一条東院、一条院と並び、後者の一条院は、まさに一条天皇時代の里内裏である。

紫式部が、中宮彰子のもとに出仕した折の内裏もこの邸であったのだ。先程の一条東院の真南に検非違使もあつた。一条院の西の、今の大宮通が大内裏の東の通であり、内裏をはじめとして、大蔵省、近衛府、枕草子で周知の職御曹司など、様々な建物が昔はあつた。筆者はこの西陣の南の地で三十年間育つたのであるが、今は碑が何基か立ち、地名に残るだけで、人家が建て込んで何ら面影はない。却って現在の京都御所(前回で触れた落葉宮一条邸や藤原道長一条邸あたり)内の紫宸殿や清涼殿のほうが、どちらかといえば、千年前の姿をほのかに感じさせてくれる。岡崎の平安神宮の拝殿は、大極殿を、

神門は応天門を八分の五に縮小して模したものである。そうして大内裏、内裏内での建物の位置関係や歴史、それに源氏物語とのかかわりについては、前回の初めのほうで述べた『京都源氏物語地図』などに譲って、我々は大内裏のまわりの平安朝の建築物を見ていくことにしよう。

一条院の西北(京外)が、桃園——桃園小学校はこの名に因む——であり、もとはその名の如く桃園であつたが、後に邸宅が営まれるようになった。その南東部分は、朝顔齋院の父である桃園式部卿宮の邸宅である(朝顔)。この北が、前回で記述した式子内親王の紫野齋院である。さらにまさに大内裏の北西角に、菅原道真の怨霊鎮めの北野天満宮、その敷地内に、右近馬場があり、前者については何も贅言を弄することもなからう。右近馬場については、現在もその跡が残っており、伊勢物語「むかし、右近の馬場のひをりの日、…」(第九十九段)『新日本古典文学大系』一七五頁)などでも知られるように、男女の出会いの場でもあつたのだ。さらに大内裏の西・はるか彼方、今の妙心寺あたりに宇多院もあつた。

では、大内裏の東を主として南の建物を見ていくことにしよう。大内裏の南東隅に四町の冷泉院があり、ここは、歴代天皇に利用され、また上皇の御所ともなつた。物語では、まさに冷泉帝が譲位した後の御所である(鈴虫、匂宮)。その北に神祇町、東宮町、修理職があり、修理

職の南東に本院（時平）がある。その南が四町の高陽院であり、頼通の時に改築して、冷泉院とともに豪邸となった。その南東が陽成院であり、その名の通り、陽成上皇の御所である。またその南西に二条院（穩子の御所）が存在し、物語では大后が住む、光源氏のライバル方、右大臣邸とされている（若菜上）。そしてその東に二条殿があり、道長が三女威子の里邸として新造したものである。またその北が少将井殿（枕草子）、その西側が小野宮、つまり実資の邸宅である。その北が小野宮北家（隆家・枕草子）である。その北北東に小一条殿（敦明親王）があり、その東に花山院つまり花山上皇の御所がある。またその東南東に紀貫之邸があり、土佐で愛娘を失くし「生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ」ともらす。土佐日記の最末などでおなじみである。その南東、つまり今の京都御所の南東隅が、あの愛すべき醜女末摘花邸である（蓬生）。その北東に、麗景殿女御中川邸（京外）があり、女御のみならず、妹花散里が暮らしていた（花散里。その南に法興院がある。

また京内に戻って、今の寺町御池北西一町が、山井殿で、紅梅右大臣三條邸が所在していた（竹河）。その西が中西殿（三條右大臣定方）で、髭黒、玉鬘三條邸である（真木柱、竹河）。その西が大西殿（右大臣藤原定方の邸宅）である。その北が二条東院で、光源氏に伝領されたもの

である（松風、濡標、少女、初音、匂宮）。その西が山吹殿（高子の御所）・小二条殿であり、二条院として源氏物語中に頻出する。その南に隣接するのが、竹三條宮（枕草子によく出てくる定子が子を出産した、平生昌邸説もある）であり、そこは女三宮三條宮（鈴虫、匂宮、総角）とされる。そしてその南に並ぶのが、あの伊勢物語の主人公在原業平邸であり、今は他の市内の史跡同様、一基の石碑が立つにすぎない。その南、京都文化博物館の地が三條高倉であり、式子内親王の生まれた場所であり、また故按察大納言家、つまり紫上が二条院に引き取られるまで、この家で過ごしたのであり（若菜）、薫三條新造邸でもあったのだ。その南西が、京のへソ石のある、聖徳太子創建の、親鸞ゆかりの六角堂である。その真北に三條院があり、西に鴨院（冷泉上皇）がある。そして、その北が、二条宮、あの定子の父藤原道隆の邸宅である。ここは藤壺三條宮とされる（賢木）。その西があの有名な東三條院・殿であり、藤原摂関家相伝の邸宅として知られている。ここは物語では、右大臣二条邸であり、源氏のライバルの頭中将が、後に二条大臣と呼ばれた（真木柱）。その南が高松殿であり、源高明邸であったが、明子に伝領された。その南西が常陸介三條方違所で、浮舟が、匂宮からの危難を受けようとしたので、母が避難させた所である。その北に閑院があり、冬嗣の邸宅のあった所である。さらにその西の

二町が堀河院で、基経邸であった。その南西が左大臣三條邸と想定され、葵上の実家であり、後、夕霧と雲井雁夫妻が住んだ所でもあった（葵、藤裏葉）。その北西八町分にも及ぶのが神泉苑であり、当時国家の中心的施設であった。現在は小じんまりとした苑となつて残存している。またその西四町分を占めるのが、大学寮であり、まさに大学で、菅原道真、大江朝綱などの学者を輩出した。今は一基の石碑と源氏物語千年紀の説明板が残るのみで、その碑の北には、順に市立中京中学校、府立朱雀高校、市立二条中学校と、大学ならぬ公立学校が並存している。大学寮の南東には、弘文学院があり、その南に勸学院がある。「勸学院の雀は蒙求を囀る」の句が想起される。そしてその西が契学院で、これも勸学院と並ぶ教育施設であった。その北西に二町の穀倉院があり、その西に橘氏の私立学校である学館院があった。その学館院の北西、大内裏の南西隅に、百人一首十一「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣船」の歌人でもあり、冥府の役人の伝説を持つ小野篁邸がある。

（続く）